

令和2年豆作り講習会の開催について

(公財)日本豆類協会

(公財)日本豆類協会では、北海道における豆類の適正な作付面積の確保と栽培管理技術の高位平準化を通じ、需要に応じた良質豆類を安定的に生産するため、農林水産省穀物課、北海道庁、道内関係機関・団体の協力を得て、昭和41年から「豆作り講習会」を開催してきました。

本年は、1月30日、31日、2月6日、7日に道内4会場において開催しましたので、その概要をご紹介します。

1. 「豆作り講習会」の概要

(1) 日程、会場等

日程	会場	参加人数
令和2年1月30日(木)	石狩会場(江別市)	180名
1月31日(金)	上川会場(剣淵町)	113名
2月6日(木)	オホーツク会場(訓子府町)	121名
2月7日(金)	十勝会場(芽室町)	281名
		計695名

(2) プログラム及び講師等

時間(目安)	内容	講師等
10:00~	開会	○司会：北海道農政部農産振興課
10:15~10:45	①豆類をめぐる情勢	○講師：農林水産省政策統括官付穀物課
10:45~11:45	②道産豆類への要望	○講師：日本製館協同組合連合会(1/30・31)、全国和菓子協会(2/6・7)
11:45~12:30	昼食	
12:30~13:15	③豆類の計画生産と需給事情	○講師：ホクレン農業協同組合連合会、北海道農業協同組合中央会
13:15~14:15	④良質豆類の生産	○講師：地方独立行政法人北海道立総合研究機構農業研究本部
14:15~14:30	⑤総体質疑	

2. 「豆作り講習会」の開催状況

(1) 石狩会場(1月30日)、上川会場(1月31日)

冒頭、当協会の飯田常務から挨拶を行った後、講師の方々からご講演をいただきました。このうち、農林水産省政策統括官付穀物課の萱野雑穀係長から「豆類をめぐる情勢」について、また、実需者を代表して、日本製館協同組合連合会の内藤副理事長から道産豆類への要望と題してご講演いただきました。その中で、今後の情勢を踏まえ、実需者と生産者の間でもっと北海道の小豆の状況(年々で異なる味、品質等)についてコミュニケーションを大切にして相互の情報交換を行っていくことが必要ではないか、また、十勝地域に小

豆の作付が集中しているが、供給の安定化を図るため、その他の地域でも作付を増やしていただきたい旨の発言がありました。

昼食後、北海道農業協同組合中央会、ホクレン農業協同組合連合会から「豆類の計画生産と需給状況」、「令和2年産の畑作物作付に向けた10のメッセージ」について講演があり、最後に、「良質豆類の生産」と題して、地方独立行政法人北海道立総合研究機構農業研究本部の研究者から、近年育成された「ちはやひめ」、「エリモ167」、「きたロツソ」、「秋晴れ」等の紹介や小豆の「茎疫病」、「さび病」等及びその防除方策について説明がありました。

その後の総体質疑では、「小豆のハダニの具体的な対策、育種による大福豆のつる性の改良の可能性」、「新品種ちはやひめの普及時期」、「病害発生時の茎葉の処理対策」についての質問や、「海外の小豆産地等の映像をこの研修会で見せてほしい」、「生産者のモチベーションを高める上では海外現地視察も有効ではないか」との要望も出され、質疑応答を経て閉会しました。



全国和菓子協会専務理事の講演



日本製館協同組合連合会 内藤副理事長の講演

(2) オホーツク会場（2月6日）、十勝会場（2月7日）

冒頭、当協会の安永参与から挨拶を行った後、石狩会場、上川会場と同趣旨で農林水産省政策統括官付穀物課の大西課長補佐並びに全国和菓子協会の専務理事から、それぞれ講演をいただきました。専務理事からは、豆の餡子に含まれる餡粒子が難消化性デンプンとして腸内環境の改善に役立っているという最近の研究成果の紹介や、実需者が安定的に北海道産小豆を使用していくためには、2万5千ヘクタールの作付けが必要との要望がありました。

昼食後は、ホクレン農業協同組合連合会、北海道農業協同組合中央会から講演があり、その後、地方独立行政法人北海道立総合研究機構農業研究本部の研究者から、良質豆類の生産に係る豆類の新品種、豆類において注意を要する病虫害対策、小豆の密植栽培の留意点、金時の色流れ被害軽減策について説明がありました。

質疑では、「日米貿易協定交渉の過程で大豆のGM表示について米国側から何か要請があったのか」、「十勝産小豆は実需から指名買われているというが他の産地と比べどのような点が優れているのか」、「オホーツク地域にはビーンズファクトリーができ小豆の生産体制の整備が着々と進んでおり、十勝もうかうかできないのではないか」等の質問や意見があり、質疑応答を経て閉会しました。